

紀南養護専攻科を考える会 研究集会 10/7

「障がい者にも進路選択の拡大を！」とのスローガンで、「高等部卒業後 20 歳までの教育の延長」を訴え、設立した我々「紀南養護専攻科を考える会」（会長 出口幸三郎）は、「県立専攻科設立」を目標に研究してまいりました。

その第 10 回目の研究集会が、10 月 7 日田辺市のビッグ U にて開催されました。今回初めて平日の夜間の開催としたところ、保護者、教員、福祉職員等、障がい者にかかわる方を中心に、47 名もの例年にない大勢の参加者となりました。

今回の講演は、当会の師匠的存在である、大阪やしま学園高等専修学校の専攻科のベテラン教師、安達俊昭先生による「フォレスクールが学んだ、やしまのほんまもん学習！」～障がい者教育一筋 21 年、だから言える！超大切なほんまもん学習！～と題した講演。

やしま学園の教育概念・教育目標を表した図を基に、現場での実践を報告し、一人一人の個別の成長をわかりやすくユーモアたっぷりで語ってくれました。「青年期の教育は、失敗を繰り返した発見が大切で、その積み上げが経験値と自信につながる。仲間とそれを行えば仲間という財産になり、社会でも少々の困難に折れない力が出来る。」と締めくくりました。

また講演に先立ち総会において、統合する南紀・はまゆう支援学校の、今後の学校運営に対する「全国初の「福祉型専攻科」発祥の地に、「全国初の県立本物専攻科」を！」（別紙）と題した提言を会長がアピール宣言し、満場の拍手を得ました。

全国初の「福祉型専攻科」発祥の地に、全国初の「県立ほんもの専攻科」を！
—南紀・はまゆう両支援学校統合にあたってのアピール—

先日、和歌山県教育委員会は、南紀・はまゆう両支援学校を統合することを発表しました。

私たちは、9年前に「はまゆう養護学校（現在、支援学校）高等部に2年間の専攻科設置」を掲げて、保護者を中心に「紀南養護専攻科を考える会」を設立し、「障がい者にも進路選択の拡大を！」とのスローガンで活動してまいりましたが、この機会に「多様な教育的ニーズに対応する教育」を謳う統合校の高等部に専攻科の設置を提案するものです。

「障がい者は成長が遅い、でも18歳になると働くしか選択肢がない！」「もっと勉強して、自信をつけてから社会に出たい！」「高等部卒業後に進学がほしい！」、私たちは、生徒・保護者のこうした声を実現したいと願っています。しかし、現状は支援学校高等部を卒業後、無理やり厳しい社会に出て、つまずいて、ひきこもりやニートになってしまった障がいを持つ青年が、紀南だけでなく全国にたくさんいます。

我々は、そんな障がい青年を出さないようにと、新しいアイデアで福祉施策を使った「学びの作業所 フォレスクール」（ふたば福祉会設立・運営）を平成20年4月に全国で初めて開所しました。

この試みは、同じ思いをもつ多くの方々の共感を呼び、「フォレスクール」には全国から大勢の見学者が訪れました。「福祉型専攻科」と呼ばれるこの方法は、その後各地に広がり、今や北海道から鹿児島まで全国に30か所以上開所され、今もさらにすごい勢いで広がっています。

教育学的にも、障がい者の青年期教育の大切さが認められ、多感な青年期の人間力を高める学習活動を通じて、自立した人格形成、自分の願いや要求を伝え、周囲の人と豊かに交流できる力を備えることが確かめられています。

事実、フォレスクールを「卒業した」仲間たちはみんな、明るく元気に楽しく活発にいきいきと働いています。このことは高校の家庭科の教科書にも取り上げられています。

しかし、こうした取り組みは、福祉の分野における教育的営みであり、「スクール」という名を冠していますが、学校ではありません。指導員の配置等の財政面やカリキュラム・プログラムの編成等の運営面では大きな制約があります。健常の青年たちの多くが、成人期を過ぎても教育の場を保障されていることと比較すれば、大きく立ち遅れていると言わざるをえません。

以上を踏まえ、私たちは、全国初の「学びの作業所」発祥の地に、全国初の「県立のほんもの専攻科」を南紀・はまゆう両支援学校統合後の高等部に、めだま事業として設置することを提案するものです。

多くの皆様のご理解とご支援をお願いいたします。

2016年10月7日 第10回紀南養護専攻科を考える会 総会